
僕らの戦情記

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの戦情記

【Nコード】

N3427B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

ある日、勝田はゲームから出てきた妖精によって異世界へと連れて行かれる。

第1話〜第10話

Ⅱ 第1話 異次元Ⅱ

私がこの話を聞いたのはいつだろうか。多分、そう遠くの話ではない。時空というのを超えたいがためにタイムマシンを作った少年というのがいたそう。しかし、時空というのは怖いものである。その時空で起こったあるひとつの物語でも語ってみることにしよう。

ある日、いつもと変わりにゲームをしていた少年がいた。名前は勝田と言った。なぜこの字になったかというところ、父親が茨城の勝田出身で、それをただ、しょうたと読んだだけだった。

勝田は、R・P・Gのゲームに熱中していた。それは、いろいろな部族が対立し、それをやっつけていくというゲームだった。しかし、今日だけは調子がおかしかった。プレステーション3に入れたものの、なかなかゲームが始まらなかった。

そして、さらにおかしなことが出た。それは、いきなり妖精が出てきたのだ。

「こんなのゲームに仕組まれていたわけ？」

勝田がそんなことを考えていると、妖精が話しかけてきた。

「ねえ、君は世界を救ってくれる。」

妖精の問に勝田は応答しなかった。

「ねえ、聞いているの。」

そのまま無視をし続けた。そして、妖精はある呪文を唱え始めた。

「なんだ、なんか展開を有利にしてくれるのか。」

そう思った瞬間、いきなり異次元空間が口を広げた。

そして、勝田は、謎の世界へと吸い込まれていった。

勝田が気づくと、そこは、森の中だった。周りには、部屋のものもなかった。

その代わりといっては何だが、少年が一人いた。

「目を覚ましたか。」

少年は勝田に声をかけた。

「うん。ところで、ここは、」

勝田が聞くと、少年は驚いた顔をした。

「なんだい、君はここを知らないのかい。ここは、この地区では恐れられている場所だというのに・・・。」

そして、少年は言った。

「ここは、一死人の森さ。昔、危機が起きた時に、人々が逃げた森なのだが、その人たちは皆死んでしまった。その霊がこの森に出るといわれている。」

そして、少年は駆け出した。

「こんな不気味なところにいたってしょうがない。近くにある僕のテントにおいでよ。」

Ⅱ 第2話 荒れ狂う世界Ⅱ

「ヘクシヨン。」

勝田はくしゃみをした。

「大丈夫か。はい。」

少年は、勝田にミルクを持ってきた。

「ありがとう。」

そして、少年は言った。

「あしたにでもここを離れるか。」

「一体、どういうこと。君はここに住んでいるんじゃない・・・。」

「いや、僕は、国から追いかけてられているんだ。」

少年の言葉に、勝田は驚いた。少年は話を続けた。

「この世界は、もうだめなんだ。何もかもが。」

「それって、どういうこと。」

勝田が少年に聞いた。

「僕は実は、兵役で宇宙へ行っている年なんだ。」

「宇宙？」

勝田は空を見上げた。

「ああ、今、世界は、宇宙と、地上で紛争を起こしている。」

勝田は少し驚いた。そして言った。

「しかし、なんで逃げ出したの。」

「それは、僕を国は殺そうとしたからだよ。」

それに勝田はさらに驚いた。

そして、少年は、さらに話を続けた。

「この国では、子供が生まれて、そして、小学校5年のときに、兵軍学校というところで、男子はある試験を受ける。それは、軍隊入団。男なら、誰もが逃げられないものだった。そこでは、体力・病気診断を行った。ここまでは普通なのだが・・・」

少年は泣き始めた。勝田は、少年を抱いた。

「大丈夫。俺と一緒に行く。」

それに少年はうなづいた。すこしたった頃、まだ少年は口を開いた。「僕は、友達をなくした。なぜなら、その試験に合格できなかったものは、夢の国というところに連れて行かされる。そして、そこで厳しい労働が待っているんだ。食事もらえずに、ただ一日中、働かされる。そして、皆だんだん力がなくなり、亡くなっていくんだ。」

「そうなのか。」

勝田は話を聞き終わると、少し黙ってしまった。

「この国によって、少年たちが困ったことになっている。助けなくちゃ。」

そっという心が芽生え始めた。それと同時に夜が明けようとしていた。

Ⅱ 第3話 移動Ⅱ

そして、朝が来た。勝田は、朝から、少年と一緒にテントを片付けたりしていた。

少年が言った。

「僕は、一人でも大丈夫だ。別について来なくても・・・」

「いや、別にいいよ。国の人がかわいそうだから。」

勝田はそう少年に答えた。

そして、勝田と少年はその場所を後にしようとしていた。

「忘れ物はないな。」

少年はあたりをみまわして、自分のものが落ちていないか確認をした。

「そういえば、自己紹介、まだだったね。僕は、順平。」

「俺は勝田。」

そして、順平と勝田はそこを後にした。

「昨日はありがとう。」

順平は言った。

「いや。僕のほうこそありがとう」

と、勝田は返事をした。

「そういえば、それ何？」

順平は、勝田が持っていた機械を指差した。

「ああ、なんだこれは。」

「こんにちは、順平君。勝田君」

機械からの声に順平と勝田はびっくりした。

「ごめん、私、妖精のラウルです。よろしく。」

「よろしく」

二人は同時にラウルに声をかけた。

「よかった。これで三人だね。」

そして、順平と勝田は道を進んだ。

「そういえば、順平はどこに向かっているんだい。」

「それは、第二の都市、カスパさ。」

「順平はそんなところ行って大丈夫なのか？」

勝田の問に、順平はうなずいた。そして、地平線のかなたから町が見えてきた。

それがカスパだった。これから一体どんなことがおこるのであろうか。

Ⅱ 第4話 検問Ⅱ

カスパの町の前には、検問があつた。

「あれ、こんなところに検問なつてあつたかな。」

そんなことをいるうちに、検問所の職員がきた。

「その少年。ちょっと。」

それは勝田にかけられたものだった。

「あつ。」

順平が気づいた時には遅かった。

順平は、変装していたので、なんとか捕まらなかったか、背も少し高い勝田は、あっけなく職員に連れて行かれてしまった。

勝田は町の警察機関に連れて行かれた。

「危なかった。もしも反乱や強盗を起こしたらたまったもんじゃない。」

警官は勝田にはき捨てるように言った。

「さて、じゃあ、軍人権検査センターぐんじんけんけんせんたーに送る準備ができたようだ。

おい。こっちへ来い。」

そして、勝田は黒いバンに乘せられ、軍人権検査センターに連れて行かれた。

軍人権検査センターは3階建てで、ちょっと古かった。今の日本で言うなら、昭和50年制と言ったほうが分かりやすいかもしれない。鉄筋コンクリート造り、外壁には茶色いタイルが貼られたビルだ。そして、担当の職員は言った。

「すいませんが、ここに書いている用紙の順番でこれから、私と一緒ににまわっていきます。」

そして、勝田と職員は、暗い廊下を歩いていった。廊下の突き当たりには、体育館みたいところがあった。まず、測

ったのは、身長・体重（重くちゃあ、乗せられないもん）・座高（高すぎちゃあ、乗れないもん）・視力だった。

「では、身体能力行きますか。」

そして、腹筋・反復・短距離など、基本的な能力を測って行った。

Ⅱ 第5話 国のためにⅡ

勝田たちはなんとか基本的な能力は測り終わった。

そして、次の日、結果が出た。

「すべての項目が出来ていますね。」

職員は勝田にそう言った。しかし、このときはまだ平和だった。

そして、勝田はカスパの町にある。役所の軍事課の課長のところへ連れて行かされた。

課長は言った。

「君を処罰する気は私にはないのだが、国からじぎきの命令があつて、処罰を下さなければならない。前はこんなことなどなかったのに。」

そして、課長は言った。

「国からの罰則^{ばつそく}として、隣町^{となりまち}ヒムラの科学施設にて、実験台として罪を償うこと。」

それを読み終わったあとの課長の顔は泣きそうだった。そして、勝田にその令状が渡された。

「ごめんな。」

課長は勝田に言った。勝田の心の中には国への怒りと課長への悲しさが混ざった。

勝田は言いたかった。しかし、この状況で言えるはずがなかった。課長は努力してくれたように思えた。しかし、こんな結果になってしまったのだと勝田は認識^{にんしき}した。

そして、勝田が発言をしないうちにまた黒いバンに乗せられ、カスパを後にした。

研究者の昭二^{しょうじ}は、ある日こんな話を持ちかけられた。それは、国の役人からだった。

「昭二さん。ちょっとお時間いいですか。」

それに昭二は返事をした。

「実は、ヒムラで、ロボット機械を作ろうとしているんです。」

役人が話したことに昭二は驚いた。

「一体……」

昭二は科学の進歩かと思ったが、役人はさらに言った。

「もしかすると、昭二さんが思っていることと違うと思いますので、その設計図をお渡しします。」

そして、昭二に設計図が渡されて、それを見た。そこにはなぜか人間が入るところがあった。

「これは……。」

それを言おうとした時、役人はもういなくなっていた。

Ⅱ 第6話 勝田を救うためにⅡ

そして、カスパの町の中では、ある少年が捕まって、この機械に入られることが噂になっていた。

昭二は、どうしても許せなかった。国に不信感を抱いた。そして、次の日、あの役人のところへ行った。

「参加させてください。」

その言葉に役人は喜んだ。昭二は、国の中で優秀なのだ。

役人は言った。

「では、案内を自宅に送付します。それをご覧になってからお越しください。」

順平も町の噂を聞いていた。そして、警察の前で、ひそかに黒いバ
ンに忍び込んだ。

なぜか、バンには大きな箱があった。多分、捜査用に使うのだろう。順平はその中に隠れていたのだ。

バンは、砂漠地帯を通り、隣の町、ヒムラに着いた。そして、勝田は研究施設の地下室に放りこまれた。

地下室にはもう一人、少女がいた。勝田は声をかけた。

「やあ。」

それに少女は返事ひとつ返さなかった。

勝田は退屈^{たいくつ}な時間をすごした。なんと、食事もでないのである。しかも、少女はぜんぜん反応しなかった。そして、いつのまにか夜になっていた。勝田はやることがないので、寝ることにした。コンクリートの床の上に無理矢理寝た。コンクリートの床は冷たいが、布団などいいものはなかった。

勝田は夢の中で見知らぬ少女と出会った。あの少女ではない。見たことのないような少女だった。

Ⅱ 第7話 死神の少女Ⅱ

その少女は、勝田に話しかけた。

「もうすぐ。私の出番のようね。その前に仲良くしようね。」

そして、勝田のほほにキスをした。それに勝田は驚きと変な感触を覚えた。

まさか、いきなり夢の中でキスされるとは・・・。

しかし、再び勝田は不思議な気持ちになった。あの少女はという思いだった。別に恋とかそういうものではない。ただ、勝田には少女の発言が気になっただけだった。

その少女は目の前で勝田を見つめている。そして、声をかけた。

「びつくりさせちゃったみたいね。でも、私、恋しちやいそう。今までこんなかわいい少年を連れてってなんかいないもん。」

勝田はさらに心がうずうずしてきた。思春期^{ししゅんき}っていうのはそういうもののなかろう。

しかし、連れて行くという言葉引つかかって、ついに少女に聞いた。
「ねえ、一体、僕をどこに連れて行くの。」

それに少女は怖い顔をしていった。

「それは、死後の世界よ。」

それに驚いた勝田は目を覚ました。もう朝だった。

そして、奥にいた少女は冷めた目で言った。

「あなたって、これから何されるか分からないのによくのんきに寝てられるわね。それに昨日だって、よくまあ、話しかける勇気があったものね。誰か助けにでも来てくれるの。幼稚園児でも。」

「いや、別に。」

勝田は良平のことを思った。良平は今どうしているだろうか。そして、助けに来てくれないだろうか。

そして、ついに研究所の職員に誘導されて、検査室に呼ばれた。そこで、最終的な検査を行い、それから機械の中へ入れ、そして、医師によって、脳を停止した状態で生殖^{せいしよく}できるようにするという流れだ。つまり、ここを過ぎれば、あの少女と一緒にあの世へ行かなければならなくなるのだ。そして、検査は始まった。

Ⅱ 第8話 勝田奪い返し大作戦Ⅱ

門の前に怪しい少年がいた。

「君は、だれ。」

昭二は聞いた。それに少年は驚いた。

その少年とは、良平だった。

「僕は、勝田を助けに来たんだ。」

それに昭二たちは驚いた。

「僕たちもだよ。いい方法があるんだ。一緒にてつだってくれないか。」

そして、昭二たちは仲間を増やして、研究所に入った。入ったところで、警備員に捕まった。

「君たちは、何の用事でここに来たんだ。」

それに昭二が警備員に言った。

「私の助手で、ぜひともこの研究に参加したいと言って来たんだ。」
「しかし。」

警備員が困っているところに、この研究所の所長らしき人物が現れてこう言った。

「いいじゃないか。こんな経験は若い助手には経験できない。是非とも参加して、学んでいってくれ。昭二さんの助手なんて、とても優秀ゆうしゅうなんだろうな・・・。」

そして、昭二たちはゲートを通り抜けた。人気のないところに行く
と昭二が言った。

「よく、通れたな。」

「いや、昭二さんのおかげですよ。」

ペナルティはそう言った。

そして、昭二は、勝田にいる控え室へと連れて行つた。

「ここに少年はいる。」

そして、ドアを開けた。

「誰よ。」

そこには白衣をきた美女が立っていた。

そして良平はそばにいた勝田に言った。

「勝田なんか、美女に鼻の下でも伸ばしてろ。」

良平はその場から逃げ去ってしまった。

「ごめんな。勝田。さあ、逃げよう。」

そして、おいていかれた昭二は勝田と一緒に逃げた。

「待て。」

警備員は、4人を追いかけた。しかし、研究所を飛び出して、しばらく走っていると警備員はいなくなった。

町の検問を通り越して、砂漠地帯を歩いていった。そして、砂漠のど真ん中にオアシスが見えた。

「もしかすると良平はあそこにいるかもしれない。」

昭二はそう言った。

Ⅱ 第9話 オアシスⅡ

そして、オアシスに來ると確かに良平は木陰の後ろにいた。

勝田は急いで良平の前へ行った。そして、頭を下げて言った。

「さっきはありがとう。」

しかし、良平は下を向いたままだった。その状態が何分か続いていった。そして、やっとペナルティは口を開いた。

「いつから勝田はそうなったんだ。前の勝田のほうが好きだった。」

それに勝田は困った。自分ではそう思っていなかった。

昭二はついに良平に怒った。

「別に、いいじゃないか。男なら通る道なんだよ。ねえ良平。」

それに良平は言った。

「確かにそうかもしれない。しかし、勝田だけにはなってほしくなかった。勝田は、素直だからいいんだ。でも、なんだかだんだん素直さが無くなっていつているようにしか見えないんだ。」

勝田は良平の言葉に何かを感じた。それは何か忘れていたものかもしれない。でもその正体は謎のままだった。

「自分は何かが変わってしまったんだ。」

勝田の心の中をその言葉が飛び交った。

「慮兵もいい加減にしないか。お前の気持ちだっけ分かるが・・・」
昭二が言ったが、勝田を止めた。そして、良平に言った。

「たしかに、何かおかしかったかもしれない。でも、俺にはわからないんだ。どこが変わってしまったのか。」

それに良平は言った。

「もしかすると、僕もおかしかったかもしれない。ごめん、こんな迷惑をかけて。」

二人が仲良くなったところで昭二が言った。

「さあ、見つからないうちにどこかへ行かなければ。」

昭二が言った時、砂漠の中に少女が立っていた。

「あの子は、研究所の。」

勝田は驚いた口調で言った。

Ⅱ 第10話 貿易の町ムラヤⅡ

「さっきはありがとう。助けてくれて。」

少女は昭二に言った。そして、少女は勝田のほうを向いてこう言った。

「よかったわ。ほんとうに、あなたって、運がいいのね。」

それに勝田は困った。別に運がいいわけではない。多分、こんなにいろいろなところでいろいろな相手と戦わなくてはいけないことが運がいいことなのだろうか。

そして、少女はあるところへと姿を消した。

勝田たちも、体制を整え、砂漠さばくを歩き始めた。

二時間後、あの砂漠を越えた。

「ここは、もう他の国だ。たぶんあいつらも追いかけてはこれないだろう。」

昭二はそう言った。

「しかし、なぜ国境がないんですか。」

勝田は変な質問をした。たしかに国境には壁だの軍隊だのがいる。しかし、今通ってきた道には軍隊などは一人もいなかった。

「それは、この国との貿易を事実上認めているからだよ。それに、この国は、平和主義国へいわしゆぎこくで、最低限の防衛しかしていないんだ。」

昭二は言った。

「平和主義国？」

勝田はすこし疑問に思った。前、昭二は地球上すべてで戦争が起きているといった。当然、戦争を起こしたのは各国のほずである。その疑問を持ったまま、ムラヤの都市に入った。

ムラヤの町は今まで見てきた都市よりも大きかった。

町を歩いていると昭二は言った。

「これからどうするか。」

それに皆、何も思いつかなかった。そして、昭二は言った。

「じゃあ、わしの知り合いの研究所にお世話になるか。」

「そうしますか。」

梅園先生はそれに賛成した。どちらにしろ、今日はこの町に泊まらなければならない。

そして、町のはずれにある研究所についた。

「やあ、久しぶり。」

昭二に研究所から出てきた知人はこういった。

「ああ。今日はここに泊めてもらえないか。」

「ああ。いいが。」

昭二たちは何とか宿を獲得したのだった。

第11話〜第18話

Ⅱ 第11話 イオ国へ。決断Ⅱ

そして、知人は昭二に聞いた。

「まさか、研究所からまさか助け出したんじゃないだろうな。」

それに昭二はうなずいた。

「参ったことをしたもんだな。たしかに、人をあそこまでやるのはどうかと思うが、それよりもお前の名誉のほうが大切なのではないのか。」

「いや。そんなことはない。今、あの国は滅びかけている。戦争をしてなにがいいんだ。あのままでは国はどんどんやせ細ってしまうじゃないか。」

「しかし・・・」

食事を取っていたのに、その話でもちつきりになっていた。二人の研究者の考えは真つ二つに分かれていた。

そのころ、イオ国では、大変な大騒ぎになっていた。

国王の部下は言った。

「どうやら、昭二たちはザイ国に逃げたようです。」

「そうか。では、攻撃をはじめるとするか。」

「ちよつと待つてください。国王様。」

国王の発言に部下が待ったをかけた。

「そんな戦力を出すほどの兵力はありません。」

「そんなことはない。同盟を結んだ国に連絡しろ。」

部下は国王の前では無力だった。

何を言っても、最近は無理やり押し通された。

「最近の国王はどうしたものだろうか。」

廊下で、部下はため息をついた。今のイオ国では、表向きは国王に

忠誠心を誓いつつも、裏ではこんな状況なのである。

そんなことを知ってか、知らぬかわからないが、知人はこんなことを言い始めた。

「ある商人から聞いたのだが、どうやら、今、イオ国は体力を消耗しているそうだ。そして、人々は、国王への忠誠心などがなくなっているそうだ。」

その情報に昭二は言った。

「そうか。ありがとう。」

知人はさらに付け加えた。

「しょうがない。応援してやる。ほしいものがあれば、言ってくればよい。」

そして、大きな部屋に勝田たちを集めた。

昭二は言った。

「食事の時に、私の知人は、協力してくれるといった。どうだ、国を再生させないか。平和な国に。」

それに勝田たちはうなずいた。

Ⅱ第12話 見習いサンタの絶望Ⅱ

次の日、昭二たちは、ムラヤの町を出て、イオ国に入った。昭二たちは緊張した。もしかすると、殺されるかもしれない。しかし、自分たちには使命があった。

砂漠を歩いていると、砂漠のど真ん中に人がいた。

「もしかすると軍隊の奴かもしれない。」

昭二は言った。しかし、すぐに軍隊ではないことが分かった。服装が赤いのである。しかも、長袖、長ズボン。まるでサンタクロースのようだった。

近づいてみると、サンタだった。しかし、昭二たちが想像したあの長いひげのサンタではなく、若いサンタであった。

「どうしたんですか。」

昭二は、そのサンタに聞いた。サンタはこう答えた。

「もうだめなんです。何もかも。子供たちに届けようとしても、子供はどこかへ逃げていて、所在が分からない。さらには、サンタの中には、たまたま戦いに巻き込まれ、死んでいった仲間もいます。それで、私はサンタをやめようと。」

昭二たちは思った。そんなことはさせられなかった。どうすれば、よいのだろうか。

そのころ、国王周辺は緊迫していた。

「なに、またここへ戻ってきそうだと。さっさと捕まえる。軍隊を集める。殺してもいい。」

国王はもう大変なまでに狂気になっていた。それを誰も止めることは出来なかった。

部下は指令した。

「はやく。はやく。軍隊を出せ。誰でもいい。早く」

国は、狂気に満ちてしまっていた。

第13話 死と・・・

無理やり組まれた軍隊たちは、勝田たちがいると思われる国境付近に配備された。

「怪しい人物を見かけたら、職務質問しろ。」

隊長は、威勢よく隊員に向かっていった。

そのころ、勝田たちも気づいていた。

「これでは、ここから動けない。どうする。戦うか」

勝田はみんなに聞いた。

「俺が素手で武器を壊していく。その間に、逃げるのはどうだ。」
勝田はそう言った。しかし、それではまたとらわれの身になって、今度こそ、この世から消えてしまう。それだけは出来なかった。しかし、勝田は決断していた。たとえ、ここで死んでもいいと。

昭二の判断に勝田はこう言った。

「俺はいい。それよりも、出来るだけ多くの人を助けることが大事なんだ。俺は、もうここで死んでもいい。」

その言葉についてみんなついに動かされた。

勝田は、まるで、ゲームの主人公のように力を手に入れた。

「敵がいるぞ。」

兵士の一人は、その姿に啞然となった。

「あれはなんだ。人間と何かが合体しているぞ。」

そして、勝田は、兵士の武器を狙って攻撃を始めた。兵士は殺せなかった。兵士だって、無理やりやらされているのである。そのことを思うだけで十分だった。

そのさなか、昭二たちは脱出した。しかし、その行動を見つかってしまった。

「良平。」

昭二は叫んだ。それに答えるように言った。

「先に逃げて。僕は大丈夫だから。」

「おい生意気な小僧だ。」

昭二は逃げるしかなかった。

そして、ある村に着いた。そこには兵士はいなかった。

Ⅱ 第14話 平和村Ⅱ

昭二は、村の人に聞いた。

「軍隊の人はいませんか。」

それに村民の一人はこう答えた。

「そんな危なっかしいもの入れるわけがない。」

そして、昭二は、村民に事情を話した。

「そうかい。じゃあ、一度長老に会ってみると良い。いろいろと教えてくれるだろう。たぶん、戦っている少年も時期こちらにくるだろう。」

村民の言葉に不思議さを感じながら、ペナルティたちは、長老の家へ向かった。

長老の家に着き、事情を話すとすぐにあってくれた。

「ようこそ。平和村へ。」

「平和村？」

昭二は思わず聞き返してしまった。平和という名前がつく村は、なかった。しかも漢字表記だ。

「ここは、ある人物が開いた村なのだよ。この村はね、あの王子を嫌がっているんだ。いま、国中の村が壊されている。あの政権によって。隣の国は、平和主義でいいが、こちらは、戦争を仕掛けてもいる。この村は、ちょうど砂漠の真ん中にある山にあるので、結構分かりやすい。あそこを見ってみる。」

後ろに広がる独特の風景。山頂には風車が風を受けて回っている。

まるで、別世界だ。どこかのお話に出てきそうだ。そして、老人は続けて言った。

「この地には、争いはないのだよ。そして、逃れた民もこちらへ来る。なぜだかだ。ただ、村も小さくて、収容しきれないから、他の所へ行ってもらっている。すまないが。しかし、今回は特別に泊まってくれてよい。何日でも、」

その長老の言葉に昭二は頭を下げた。

その頃、勝田は、なんとか、兵士との戦いをまるく収めた。

そして、上空で、あの平和村を見つけた。

その時、ちょうどあの力が消えてしまった。

「おー。」

勝田は砂漠へ落ちていった。

「いたたたっ」

勝田は怪我なしで済んだが、平和村へは歩いていかなければならなかった。まあ、これもこれでいいのだろう。

Ⅱ 第15話 走れ！勝田？Ⅱ

国王は、その頃、捕まった良平をどうするか決めていた。国王は、やはり頭がおかしくなったように言った。

「少年を、公開死刑に処せ。」

「しかし、少年ですよ。国王。」

「そこまでやらなければ、あの少年たちは出てはこない。」

国王の発言に部下たちは困ってしまった。少年を処せば、国民からの反感を買うことは分かっていた。

しかし、部下たちは国王に従った。そして、順平の死刑のための準備が始まった。

まずは、このことを発表することになった。そうすれば、出てくるに違いないと思ったからである。

村では、恒例であるテレビニュースを見る会が開かれていた。村民はテレビによつて、情報を得るのである。

勝田たちも見ていたが、そのうち信じられないものが映りはじめた。それは、良平の画像だった。そして、国王の部下が話を始めた。

「さあ、反抗勢力よ。もしも、明日までに軍に投降して出てこないのならば、この少年を公開処刑とする。」

その言葉を聞いた勝田は外へ飛び出した。それを昭二は追いかけた。「おい待て。」

昭二はなんとか勝田を捕まえた。

「良平を助けに・・・」

勝田はそう言った。

「やはり、そうだったか。」

長老が出てきた。そして、長老は勝田に話しかけた。

「いいじやろう。友を助けに行きなさい。いつでも私たちは味方だ。」

そして、勝田たちは二手に別れた。まずは、勝田が先を急いだ。その後を、荷物を持ちながら昭二があるいていくというスタイルだった。

た。そうでなければ間に合うとは思えなかった。

しかし、いくらなんでも、無理があつた。この村からはとても離れていた。それを明日に着こうとするには難しいことだった。

その頃、部下たちにそのことが伝えられた。

「よし。これで立役者はそろふことになるな。」

部下は笑みを浮かべた。

Ⅱ 第16話 狙うは獲物？Ⅱ

勝田はともかく走った。なんにも考えずに。ただ、良平を助けるために。時には休憩や立ち止まったりした。しかし、その時でも、良平のことを考えていた。

一方、国王は、このことを随時聞いていた。それを聞けば聞くほど笑みが増えた。

そして、部下にも。この国では、少年を殺すということを平気で言えるようになってしまったのである。そして、本当に実行に移してしまおうとしていた。

いつもなら国王が演説をする広場には、体を固定するための台が用意された。

「さあ、明日が楽しみだ。」

国王は喜びでなかなか寝付けなかった。そのころ、勝田も、寝てはいられなかった。まだまだ首都は先であつた。

後ろを歩いていた昭二は、砂漠の中で寝た。砂が入ってくるが、テントを出すことができないので、しょうがなくここで寝ているのである。

寝静まったころ、後ろに隠れていたスパイが現れた。そして、大きな袋に昭二を入れた。

次の日、勝田は疲れながらも走った。それには妖精も感心した。それとは対照的に、国王は勝田を殺すことに何かを感じていた。多分、

快樂殺人とかいうものなのだろう。しかし、今はだれもその事実に気がついていない。

「ついに、首都が見えた。」

勝田は、地平線のかなたにある町を見つけた。これが首都のシエルパだ。

そのころ、ちょうど昭二も目覚めた。しかし、周りは白かった。そう。布の袋に入れられ、輸送されていたのだ。

そして、昭二を乗せたトラックも首都へだんだんと近づいた。

国王は、部下に呼ばれて広場に出た。国王の顔は笑みが絶えなくなっていた。

勝田は広場へ向かった。

「順平！」

勝田は広場に入ると同時に叫んだ。しかし、この後思わぬ事態が勝田たちを待ち受けていた。

Ⅱ 第17話 平和と闇Ⅱ

国王は言った。

「ようこそ。君は、ここで死んでもらう。」

それと同時に、一斉に周りの人たちが襲ってきた。

しかし、周りの人の行動は不思議だった。

まるで、心を持っていないようだった。しかし、そんなことを考えている暇はなかった。

勝田はたちまち捕まってしまった。

「さて、仲間と死んだほうがいいかな。どうせなら。」

そして、良平が袋から出された。

「良平。」

勝田は叫んだ。しかし、良平は気を失っていた。

「さつき、すこし暴れたもんで、やっといたのさ。」

国王は冷たく言った。

それに勝田は地団太踏んだ。勝田は、妖精とひそかに合体しようとした。

それに気がついていないのか、国王は部下にこう指示した。

「どうせなら、槍でさすんでなく、火の中でうなってもらおうじゃないか。」

そして、勝田たちのまわりを火が取り囲み始めた。

勝田は妖精に頼んだ。そして、あの強い力を得たのだ。

「なんだ、あれは。」

国王の指先には、強い力をもった勝田がいた。

国王は、おびえながら、部下に銃を撃たせた。しかし、簡単によけられてしまった。

勝田は、よけながら、攻撃をした。そして、兵士の中から逃げ出すものが出てきた。

「ちよつと待て。」

国王は声をかけたが、兵士たちはすべて逃げてしまった。

「くそ。」

国王はそんなことを言っていたとき、ある部下が言った。

「どうやら、町を取り囲むように、国民とザイ国の群集がいる模様で、こちらに攻めてくるようです。」

それに国王は焦って逃げ始めた。しかし、国王はすぐに捕まってしまった。

ザイ国の兵士は言った。

「大丈夫だったか。少年たち。」

それに勝田はうなずいた。

「それはよかった。この国が戦争をもうしないことになったんだよ。君たちが勇敢な行動をしてくれたおかげで。ありがとう。」

そして、それを見つめる男がいた。

その騒ぎが始まる前に、勝田たちは町を出た。良平たちも、国王が出て行く前に、やっと気がもどり、なんとか怪我をしなくてすんだのである。

良平は言った。

「これからどうするんだい。」

それに勝田は答えた。

「まだ分らない。」

良平は納得したような顔をした。

その時、良平は急に顔色を変え、うなり始めた。

「大丈夫か。」

勝田たちが言った。しかし、その時には、砂漠に血を吐いていた。

「誰か医者を呼ばないと。」

「その必要はない。」

いきなり、誰かが声をかけた。それは妖精だった。

勝田たちは妖精のほうを向いた。

「私の方向を向くんじゃない。良平は最後の言葉があるようだ。聞いてあげなさい。」

そして、また良平の方向を向いた。良平はかすかに言っていた。

「平和にしてくれてありがとう。そして、君たちにありがとう。最後は楽しい人生だった。君たちと出会って……。」

良平は言い終える前に息を引き取った。

「良平！」

勝田は良平の体をゆすつたが、まったく反応しなかった。妖精は言った。

「人には最後というものがある。それは、つまらない人生だったりするときもある。しかし、良平はいい顔をしながら行ってしまった。これほど賢いことではない。」

「じゃあ、なんで、良平が……。」

「それは運命だからだ。勝田。お前が私と会ったのも運命なんだ。勝田の心情は今是不安定であることは十分承知だ。しかし、これを

変える事はできないんだ。」

勝田は、自分の姿が分からなくなっていた。

「そういえば、返しましょう。これ以上いると家族が心配するから。」

「

そして、勝田は元の世界に戻った。しかも、時間も戻った。

画面にはふつうにゲームが表示されていた。

「一体何だったのだろう。」

勝田は不思議に思った。それはそうだろう。なぜならば、それは、偶然だったのだから……。

第11話〜第18話（後書き）

今まで読んでくれましたありがとうございます。2007年が明けるということで、僕も何か読者にいつもとは違ったメンバーでの話を作ろうと考えました。しかし、最終的には、ペナルティの話の一部抜き出して、そこから新たな展開にしたものになってしまいました。しかし、この話は不思議に終わりました。もしかすると、勝田はまた変な目に遭っているかもしれません。それは、謎のままです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3427b/>

僕らの戦情記

2010年10月11日01時35分発行